

2021年10月21日

各 位

会 社 名 アジア開発キャピタル株式会社
代表者名 代表取締役社長 アンセム ウォン
ANSELM WONG

株式会社東京機械製作所に対する

「貴社の当社らに対する2021年10月20日付け「アジアインベストメントファンド株式
会社及びアジア開発キャピタル株式会社に対する追加質問状」に対する回答」

の郵送及びFAX送信に関するお知らせ

当社は、本日、株式会社東京機械製作所に対し、別紙の「貴社の当社らに対する2021年10月20日付け「アジアインベストメントファンド株式会社及びアジア開発キャピタル株式会社に対する追加質問状」に対する回答」の郵送及びFAX送信を行いましたので、お知らせいたします。

以 上

2021年10月21日

株式会社東京機械製作所
代表取締役社長 都 並 清 史 殿

アジアインベストメントファンド株式会社
代表取締役社長 アンセム ウォン シュウセン
アジア開発キャピタル株式会社
代表取締役社長 アンセム ウォン シュウセン

貴社の当社らに対する2021年10月20日付け「アジアインベストメントファンド株式会社
及びアジア開発キャピタル株式会社に対する追加質問状」に対する回答

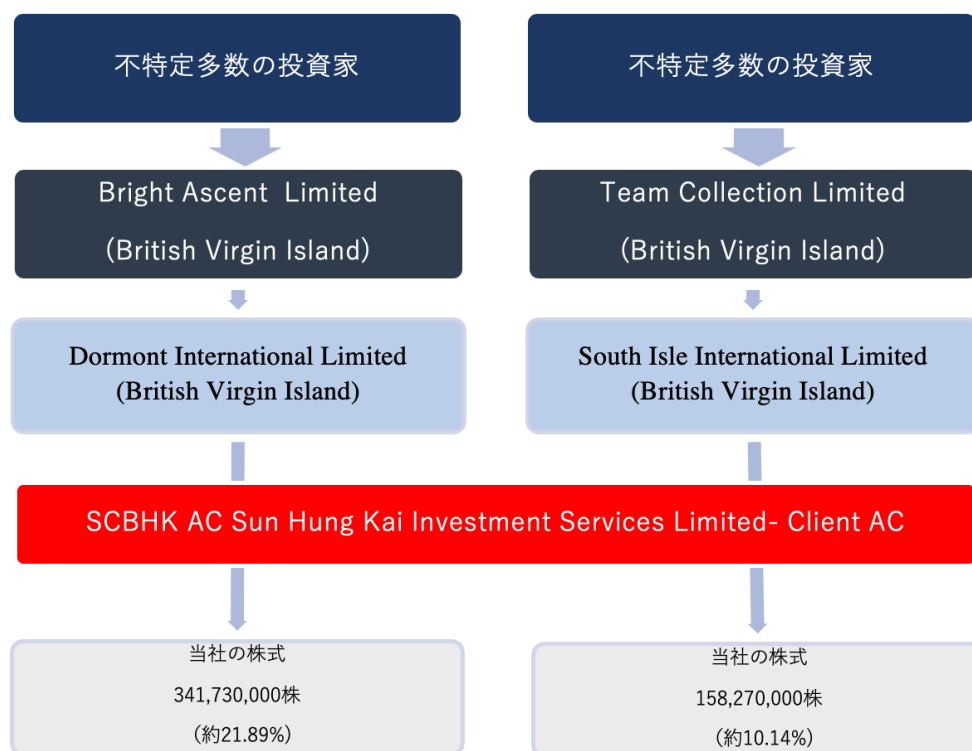
当社ら（以下では、アジア開発キャピタル株式会社を「当社」といい、アジアインベストメントファンド株式会社と併せて「当社ら」といいます。）は、貴社の当社らに対する2021年10月19日付け「アジアインベストメントファンド株式会社及びアジア開発キャピタル株式会社に対する追加質問状」について、以下のとおり回答します。

記

44. 貴社のアンセム・ウォン社長は、様々なマスメディアで、「サンフンカイはADCの株式を（9月時点で）32%所有する筆頭株主。ただ、サンフンカイによってわれわれの意思決定が左右されることはいっさいない」「日本での報道を受け、サンフンカイは苦言を呈してきた。なぜADCの投資事業で、しかも（サンフンカイの投資規模からすると）極めて小さな案件で自分たちがレピュテーション（評判）リスクに晒されないといけないのかと。これ以上こっちを巻き込んでくれるなというのが同社の受け止めで、もう（東京機械への投資を）やめてほしいと思っている」（週刊東洋経済プラス 2021年10月18日付け記事）、「（ーアジア開発の大株主は。）今は香港の会社が約34%を保有しています。（ー金融大手のサンフンカイ・グループですね。）ええ。（同グループの）オーナーからは「私たちが巻き込まないでくれ」と言われてますよ（苦笑）。一部報道で、今回の資金は全てサンフンカイ・グループが提供し、買い付けを指示しているかのように書かれていますが、まるでADですよね。逆に『目立つな』と怒られちゃっていますから」（ダイヤモンド・オンライン 2021年10月13日付け記事）等と繰り返しておられますが、かかる説明は、10月15日付けで貴社らが当社に送付してきた当社の10月11日付け追加質問状に対する回答書における、ドルモン社（アジア開発キャピタルの議決権の21.89%を保有する

英領ヴァージン諸島法人)の株式は、「不特定多数の投資家からなる資産管理会社 (Vehicles) Team Collection Limited」によって、サウス・アイル社 (アジア開発キャピタルの議決権の 10.14%を保有する英領ヴァージン諸島法人)の株式は「不特定多数の投資家からなる資産管理会社 Bright Ascent Limited (BVI)」によって、それぞれ保有されているという説明とは真っ向から食い違っています。上記回答書における貴社らの回答と貴社の代表取締役社長であって AIF の代表取締役でもあるアンセム・ウォン社長が様々なマスメディアで繰り返しておられる主張のどちらが正しいのか、このような食い違いが生じていることについての具体的な事情の説明とともに、書面にて明確にご説明下さい。

御質問の趣旨が分かりかねますものの、結論として、説明内容に食い違いは生じておりません。繰り返しになりますが、以下の図を御参照ください。



45 サンフンカイ・ストラテジック・キャピタルの 100%子会社である Dormont International Limited (以下「ドルモン社」といいます。) 及び同じく子会社である South Isle International Limited (以下「サウス・アイル社」といいます。) は、ノミニー (名義上の株主) であるのか、ご回答ください。ノミニーであるとすれば、「主要株主」として開示すべきであるのはあくまで実質株主であるため、2020 年 12 月 7 日付けで「主要株主」の異動があった

とするアジア開発キャピタルの臨時報告書における開示（サンフンカイ・ストラテジック・キャピタルが主要株主でなくなり、ドルモン社とサウス・アイル社とがアジア開発キャピタルの「主要株主」となった旨のアジア開発キャピタルの開示）は不適切であったことになると思われますが、この点に関する貴社の認識を具体的にご回答ください。

繰り返しになりますが、44.の回答に掲載した図のとおりであり、Dormont International Limited 及び South Isle International Limited が実質的にも当社の株主です。

当社の開示に問題はありませぬし、これまで、公官署から指摘を受けたこともございませぬ。

46 AIF が当社株式を始めて取得した 2021 年 6 月 9 日における当社の株価は、安値でも 701 円（高値は 750 円）であつて、この株価水準は、その直前の営業日である同年 6 月 7 日と翌 8 日を除くと、2018 年の年初以来、最も高い株価水準であつて、かかる株価水準の下で当社株式の大量買い上がりを開始したことは、2021 年 8 月 27 日に行われ、貴社らが同年 10 月 18 日にその録音音源を突如公開した当社の都並清史・代表取締役社長らと貴社らの代表取締役であるアンセム・ウォン・アジア開発キャピタル社長（AIF 代表取締役）らとの面談において、当社株式を何故買ったのかと当社都並社長との質問に対して、ウォン社長が、「株価が安かつたから」「御社のことは、株価が 250 円という割安だつた時から、1 年前よりウォッチしておりました」等と語つたことと明らかに矛盾しています。この矛盾につき、合理的な合理的な説明をお願いいたします。

2021 年 8 月 27 日の面談では、当社ら代表取締役社長アンセム ウォンが社長就任当時（2020 年 12 月 24 日に社長就任）の貴社株式の株価（終値 255 円、最安値 253 円）について言及しました。当社らとしては、当時の 250 円台も割安でしたし、今年 6 月の 700 円台でも割安だと判断したため、貴社株式を取得しました。面談時に、都並社長御自身が「その上で、確かに、その、ロジックとしてのね、あの、本来の我々のパフォーマンスに比べれば株価はまあ低廉な状態でいて」とおっしゃつていたので、貴社株式の株価が割安であつたとの考えは、貴社及び当社らの共通認識であるといえます（詳細は、下記の面談記録（※）を御確認ください。）。

※ 「東京機械製作所様との面談記録（全記録）」【時間：1 時間 03 分 26 秒】

<https://youtu.be/G2YFyMVtQ7k> 【該当箇所：45 分 32 秒から 45 分 44 秒まで】

47 AIF は、下記【表】の網掛け部分のとおり、2021 年 7 月 13 日には当社株式を 2.94%、

同月 14 日には 6.81%、同月 15 日には 6.11%、同月 19 日には 2.44%、同月 20 日には 2.71%、同月 21 日には 6.19%と、以上ともいえるほど大量の債務者株式を、それぞれわずか 1 日のうちに市場内で取得していますが、上記各日の株価増減率は、7 月 13 日には-12.75%、同月 14 日には+2.77%、同月 15 日には+0.95%、同月 19 日には+3.07%、同月 20 日には+1.50%、同月 21 日には-1.60%と、ほとんど上がっていないどころか、かえって下落している日すらあります。仮に、貴社らが主張するとおり、アルゴリズム注文の手法で、株価が上がらないようにしながら当社株式を取得できるとしても、このように株価が下落している日やさほどの上昇を見せない日に、2%超~6%超という大量の当社株式が売りに出ることなど常識では考えられません。しかも、これら 6 営業日のうち、AIF による市場関与率は、7 月 13 日を除き、40%~60%という異常な高率に上っています。以上のような異常な状況が生じるのは、AIF が予めこれら大量の当社株式の売り手と意を通じていたからではないかと考えざるを得ませんが、仮にそうでないとするれば、どうしてこのような異常な状況が生じるのかにつき、合理的な説明をお願い致します。

貴社がおっしゃる「異常な状況が生じる」が何を指すのかが分かりませんが、当社が用いたアルゴリズム注文の詳細は、一般的な注文方法として、その詳細は、本日付け当社ホームページ開示「東京機械製作所株式の取得のために用いた方法 — アルゴリズム注文について」において説明しておりますので、是非、そちらを御参照ください。

※ 質問文中の「債務者株式」は、貴社の株式を指していると思いますので、それを前提に回答しております。

以 上